伝統工芸産業史

ー近世京都手工業生産プロジェクトー

木立雅朗（立命館大学文学部教授）
和田晴吾（立命館大学文学部教授）
高　正龍（立命館大学文学部助教授）

Abstract: he traditional handicraft and its techniques in Kyoto was the one item that supported "the view of traditional Kyoto".
However, at the same time, this can be a living witness that reflects "Kyoto" from the unconventionally historical view.

In this project, we examine about Kyoto potteries, stone works, tinkering and tile productions and Nishijin waves in the ethnical and archaeological analysis mainly and also conduct the digital archives, 3D measurement, and fluorescence X-ray analysis to their techniques and materials.
We proceed our research on the traditional handcraft and its history of techniques in Kyoto comprehensively from the various fields such as archeology, ethnic studies, art history, literature history and so on.

Furthermore, we examine the relationships between the local system and history in Kyoto that supported these techniques.
Putting the starting point on present Kyoto at any time, we emphasize its continuity from the modern times to the present-day.
Also, emphasizing the changes from the ancient to modern times, and the roles and expectations of the dynasty cultures in modern times, we intend to reveal the roles that "modern times" played in the handicraft industrial production side in the long history after Heiankyou.

The establishment and the development of the traditional handicraft techniques owes to the demands in modern society rather than the ancient Heiankyo periods, and the concerted developments are expected to reveal in many fields of handcraft industries.
Based on its original traditions and yearning, this content had to be the advanced one taking in overseas techniques and cultures positively.

By examining for what kind of form the yarning and the renaissance for the dynasty cultures in the modern times accomplished in the fields of each handicraft industrial productions and how the technical and social connections between each handicraft industrial productions were, we can establish the foundation to evaluate the significant comprehensively about what they played in Kyoto and Japanese histories.

1. 京焼の総合的調査

(1) 鳴滝乾山窯跡の発掘調査・出土品整理

尾形深省によって1699年から1712年まで操業された鳴滝窯跡の発掘調査・周辺調査を2002年度より継続して行っている。鳴滝窯跡については昭和初期に発見されてから多くの人々によって私的に「発掘」されてきたが、成果が公開されることはほとんどなく、盗掘に等しい調査であった。公的に成果を報告し、正式な発掘調査の手続きを踏むことが、「乾山焼」研究にとっても、京焼研究にとっても不可欠である。

また、発掘調査に当たって、考古学担当者

（木立）だけではなく、美術史・乾山研究者の国際基督教大学リチャード・ウィルソン教授、美術史・陶磁器史の出光美術館荒川正明主任学芸委員、黄檗宗に詳しい宗教史研究者である大槻幹夫氏、文献史学でも京都の歴史に詳しい川嶋将生立命館大学教授、京都の陶磁器史・文化史の中ノ堂一信京都造形大学教授らの参加協力を得て合同調査できた意義は大きい。発掘する作業そのものは、考古学的な手続きに他ならないが、総合的な調査を行うためには、発掘段階からの共同調査が不可欠である。そのような発掘調査と成果に対する協議会を持ち続け、継続調査できた意義は京焼研究にとどまらず、考古学研究の方法論を鍛練する意味でも極めて重要である。

発掘調査の成果では、大量の乾山焼き関連の遺物が出土したが、窯などの関連遺構を検出することはできなかった。しかし、乾山窯に遡る石段や石敷き路面を確認し、乾山窯以前に当地にあった「二条家山屋敷」、あるいは「鳴滝二条殿御茶屋」の一部であると想定できた。乾山窯跡を検出することは現地の開発情況からこれ以上は不可能であるが、二条家の庭園に窯を築き、そのあとで近衛家ゆかりの法蔵寺が造営され現在に至る歴史を想定すれば、庭園の中で焼かれる優美な焼き物としての乾山焼、あたかも、修学院離宮のなかで焼かれる修学院焼のような意味をもったと推測できる。京焼の多くの窯には庇護者としての寺院や公家、皇室が控えていたことはすでに指摘されてきたことであるが、単に門前で庇護を受けて焼成しているだけではなく、積極的にそれを示す地点で焼成を行い、さらにブランド効果を高めていた可能性がでてきた。各地から京都に来る人々は立ちのぼる煙の場所を確認し、由緒ある優美な場所で焼かれた焼き物を手にして帰郷していったのではないか。そのような優美な場所であるからこそ、窯廃絶後は庭園として再整備され、破却されたのだと推測される。そのように考えるならば、発掘調査を窯跡の発掘から、窯が作られた地点の歴史的脈絡の調査に変更する必要がでてきた。そのため、窯跡の調査を継続しながらも、2003年からは二条家山屋敷の調査に力点を写し、法蔵寺創建以前の石敷き路面を検出し、17世紀中葉に遡る遺物も検出することができた。2004年度も同様の調査を継続する予定である。

大量に出土した遺物は、純粋な物原層からの出土ではなく、二次堆積によるものであり、地層の情況などから、本来の場所からは移動させられていると考えられる。しかし、含まれている遺物はほぼ一時期の遺物に限られており、複数時期の遺物が混入している様子は伺えない。そのため、一群の資料を乾山窯の遺物として考えて良い。これらの遺物の中には、多くの窯壁が含まれ、そのなかにはかなりの割合でレンガ状になるブロックが含まれている。京焼の民俗例では「オオゲタ」と呼ばれる粘土ブロックで窯体を構築した可能性が高い。ただし、こうした粘土ブロックで窯体を構築する時期は有田や瀬戸でも18世紀後半以降にはじまるという。17世紀後半にもあるが、狭間穴など、ごく一部にしか使用していないため、一般的ではないという。鳴滝の例では粘土ブロックとそうでないものの比率がどの程度か分からないため確証がないが、塗り壁式窯壁と「オオゲタ」状窯壁の割合は等しいように思われる。つまりは、かなりの部分を「オオゲタ」状粘土ブロックで構築していると想定される。だとすると、乾山窯、あるいは京焼窯の築造方法は他地域に比べてかなり先進的であった可能性もでてくる。これについては今後、各地の窯場の情況と詳細に比較検討してゆく必要がある。

（2）京焼の製作・焼成実験
－鳴滝乾山窯出土品を中心にして－

鳴滝乾山窯跡の発掘調査で出土し、文献史料や民俗調査で明らかになった京焼関連の窯や窯道具の意味について、製作・焼成・使用・廃棄に係わる様々なケースについて比較検討する。現在は「金炭窯」と言われる炭を燃料とした上絵窯の復原と焼成実験を行い、成果を速報展示や研究会で報告している。金炭窯は昭和の初期にはあまり使用されなくなっており、現在では聞き取り調査で聞き取ることも不可能である。そのため、耐久性の問題や温度の問題、燃料の量や質など、薪や電気の窯と比較してどのような特質

をもっていたのか、実験と一部の文献史料で確認するしか道がないためである。

この他、製品中心に研究が進んできた近世考古学、あるいは窯業に係わる考古学に対する反省点から、窯道具の使用方法やその意義についても、ルーツである瀬戸の技術と比較しながら検討している。

(3)京焼の民俗調査

京焼については聞き取り調査による啓蒙書がいつくか見られるが、技術的な側面を重視した研究は極めて少ない。しかも、公害防止条例によって京都市内での登り窯焼成、薪窯焼成が不可能になったため、昭和40年代から現在に至るまで、多くの登り窯やその関連資料が失われてきた。記憶をもつ人々も少なくなっている。そのため、かろうじて残されている登り窯とその関連資料について考古民俗学的調査が急務となっている。そうした中、五条坂・藤平陶芸では登り窯を保存し、併せてその関連資料もよく残しているため、その調査を行い、様々な成果を得た。

登り窯の構造とその部材、大量に残された匣鉢などの窯道具、そして上絵窯が藤平陶芸では残されている。登り窯はかつて煙道を共有して作れていたが、戦時中にジェット燃料の精製装置を焼成するため、一基をつぶして石炭窯を築造したという。現在残されている窯が周辺地形に逆らって西に向かって登っているのはそのためである。この石炭窯は現在では電気窯に替えられているが、窯屋が当時の面影を残している。さらに、戦時中に焼成していた二宮尊徳の陶器製像やジェット燃料精製装置、陶器製手榴弾なども残されており、戦時中の京焼のあり方を知る上で極めて興味深い資料として注目される。陶器製手榴弾は各地の窯場に依頼されて作られたが、信楽・瀬戸・万古の窯場では同じ型が見本として使われたと言われるが、藤平陶芸とは異なる形状の手榴弾を製造しており、手榴弾にはいくつかの異なる型が存在することが明らかになった。京都と同じ形状の手榴弾は備前焼で製造しており、形状・大きさなどが酷似している。備前では大阪の師団に納品したということから、信楽・瀬戸・万古とは異なる型で異なる依頼主から依頼されていたことが想定される。しかも、備前焼きの手榴弾はいくつかの窯元に依頼して製造されていたが、窯元毎に製作技術が異なっていた。ロクロ作りの窯元もあったが、細工物が特異で二宮尊徳像を製作していた窯元では型作りで製作されていたようである。窯元毎に得意とする技術で製作されており、製作方法まで厳密に規定されていたわけではないことが明確である。また、藤平陶芸の手榴弾は内面にも鉄釉を施しているが、備前では外面のみで内面には施していなかった。備前焼きの手榴弾では底面に番号を刻印することが普通であったが、藤平陶芸では確認できなかった。同じ型を見本としながらも、備前焼と京焼でも異なった対応をとっていたことが明らかになった。手榴弾にみるこのような対応の違いは、軍部の依頼が性能を厳しくチェックするようなものではなく、とにかく短期間に量産し、本土決戦に間に合わせようとする姿勢が如実に現れたために生じたものであろう。また、こうした違いは各窯元や産地が軍部の依頼に対してどのように対応したのかを明確に示している。伝統産業として、京焼がどのような対応を示したのか。藤平陶芸以外の京焼の手榴弾の調査も必要である。ところで、歴史的には京焼と信楽焼は極めて近く、近世後半以降、技術者と原料(陶土)は両者で共通しており、その製品も識別が困難なほどであった。そのような関係にあった信楽が、京都とは全く異なる形状の手榴弾を製作したのは、ひとえに依頼主の違いであり、歴史的皮肉である。各地で生産された手榴弾は終戦によってほとんど実戦に使用されることなく行き場を失い、各地で廃棄された。備前では「割って捨てるように命令された」にも係わらず、のちの工事で完形のまま出土する手榴弾をみるとその命令は貫徹されていなかったことが分かる。備前では貫徹された窯元とそうではなかった窯元があったようだが、京都の藤平陶芸でもほとんどが完形品であり、割っていなかったように見える。廃棄をめぐる様々な対応、その後の伝承にも地域や窯元によって様々な特質が浮かび上がってくる。たとえば、藤平陶芸では、手榴弾の内面にまで鉄釉を施した上、「京　正文」という製品に押捺する京焼独

特の店名を明記した刻印を押捺してある点などは、手榴弾にまで「京焼らしさ」を著し、他産地との差別化を計ろうとした現れではないかと想定れる。各地の歴史性に根ざした比較検討が必要であろう。今後、さらなる調査によって戦争と伝統工芸の関係、戦後におけるその復興のあり方を考える上で、極めて興味深い視点になると考えている。

(3) 陶磁器の蛍光X線分析

近年の調査で「楽焼き」あるいは「軟質施釉陶器」と呼ばれてきた陶器の一部が、鉛釉薬を使用したものと、鉛を含まない釉薬を使用したものがあることが大阪歴史博物館の調査によって判明した。そのため、これらの焼き物を「鉛釉」陶器と呼ぶことができなくなった。現在では鉛を使用しない技術はあるが、それが17世紀まで遡ることが明らかになった意義と驚きは大きい。発掘資料、伝世資料を中心にして分析資料を増加させ、そのあり方を検討することで、「楽焼き」と京焼の上絵技術との関連、他産業との関連（ガラスや鋳造など）を検討する重要な資料を提供するこどができることは間違いない。京都市内で発掘された鋳造工房の滓の分析を行っているが、今後、各種の手工業生産に関連する資料と、「楽焼き」のデータを比較検討してゆくことで、技術的関連を明らかにすることができると考えている。

(4) 陶磁器の3次元測定

考古学では「実測」という手法で遺物をデータ化し、それによって検討を進めていたが、そうしたアナログ的なデータと3次元測定によるデジタルデータの比較検討、デジタルデータとアナログデータの特質について検討し、有効なデジタルデータの利用方法を勘案するため、伝世陶磁器、民俗資料の窯道具の3次元測定を行ってきた。伝世資料ではガラス質の部分をもつ資料はレーザーが反射するために不可能であったが、釉薬やガラス質の部分を持たない焼き物では十分に測定できた。出光美術館所蔵の美術品（伝世品）の3次元測定は測定装置がもつ問題点や限界を知る上で極めてよい参考になった。また、藤平陶芸所蔵の窯道具関連の遺物についてはこの方法が極めて有効であることを確認した。今後、さらに計測を進め、その特質と活用方法についても模索をすすめたい。

2. 西陣織・正絵の調査とデジタル化

正絵とは、図案、あるいは下絵であり、明治以降、西陣織りにジャガード織りの導入とともに発展したものである。極めて近代的な資料であるが、織物本体や技術に対する注目に比べて、ほとんど省みられることがなかった貴重な絵画資料である。西陣織関係では、製品の収集や保存は一定程度なされているが、その生産関連用具、すなわち、織機をはじめとした「製品」とならない生産関連品の収集と研究は極めて遅れている。そのなかでも、正絵は一幅の絵でもあり、美術品的価値も十分にありながら、あくまで「下絵」として不当に低い評価しか与えられなかった。近年、他の美術工芸分野で「下絵」のもつ価値について評価が高まっており、西陣織においても例外ではないはずである。

こうした中で、下絵を収集し、西陣織の一連の長い工程のなかで、正絵を位置づけて行く仕事は極めて重要である。現在、大正期～昭和初期、昭和末期の約1000枚の正絵を整理し、デジタル化作業を進めている。西陣織の正絵に使用されたモチーフがどのような紋様であるか、知る上で極めて貴重な資料になる。また、さまざまな分野のデザインを貪欲に模倣する西陣織の図柄は、京都を代表するものとして各地の消費者に受け入れられてきたが、その需要と供給の関係を図案から検討することで、人々が望んだ「京都らしさ」の実態やそれに呼応する西陣側の目論見を明らかにすることができるだろう。

正絵が西陣織の長い生産工程のなかで、どのような位置をしめるものであるのかを明らかにするため、正絵からはじまる様々な工程で作られる、製品にならない生産関連品を収集し、聞き取り調査を行う予定である。

3. 篠窯跡群の分布調査

平安時代の京都の周縁部にあたり、洛西窯跡群の緑釉陶器生産を受け継ぎ、六勝寺の瓦を生産した丹波・篠窯跡群の分布調査を行い、そ

の生産の動態を検討している。

近世京都の窯業は京都の長い歴史のなかで異質な部分が大きく、平安時代以来の陶磁器生産のなかで位置づける必要がある。京都にとって窯業の意味はなにか、古代に遡って検討するには、京都の周縁で生産を行った篠窯跡群の歴史的位置は極めて興味深い。現在のところ、官窯といわれる洛北窯跡群が生産を継続しているなかで、各国の窯場が瓦や緑釉陶器を焼成しはじめ、平安京を中心とする地域に瓦を、周辺各地に緑釉陶器を供給した。これが洛北窯跡群の衰退を招くが、平安京周辺では洛北から洛西へ、洛西から丹波・篠へと緑釉陶器生産が拡大し、10世紀には近江で大規模な生産が開始されるに至る。平安京周辺の窯場の製品はは「京都産」とされ、洛北・洛西・丹波の識別は容易ではなく、互いの技術的関連が深いものであったことを物語る。その製品を識別できれば各地への供給体制の変化など、平安京を中心とした生産と供給の関連を明らかにすることができる。現在のところ、緑釉陶器生産が9世紀後半に遡り、10世紀代には近江系緑釉陶器と言われるものも生産していたことが確認された。緑釉陶器の生産が早まったこと、「近江系」と考えていたものが少量ではあれ、丹波でも生産されていたことは、全国に流通していた「近江系緑釉陶器」の意味を問い直すことになる。こうした作業が、古代の「王朝文化」の実態を明らかにするとともに、中近世の京都との比較を可能にしてくれると考える。

4. その他の産業の民俗考古学的調査

和鏡の民俗考古学的調査

山本合金株式会社は京都で唯一、和鏡の伝統的技術を伝承している。その技術をデジタル化し、民俗調査と併せて記録することは極めて重要な作業である。

山本合金は戦前、軍部からの軍需品の鋳造を断ってまで、各地の神社の御神体としての和鏡作りを専門に行った。その結果、戦後の和鏡製造は昭和30年代まで20年以上途絶えるという憂き目を見たのであるが、戦後は仏具作りに主たる製品をかえ、高い技術で評判を得たという。和鏡の技術の高さを示すとともに、京都における「転業」のあり方や、手工業生産の横のつながりを示すものとして極めて重要である。さらに、戦時中に鋳造した神社とその鏡の種類・数量についての覚書が残されており、「関東神社」や「南洋神社」など、植民地の神社にも鏡を納入していたことが分かる上、その仲介業者と発注者までが記録されている。京焼と同じように、戦争に対応した京都の手工業生産の役割は決して低くなく、しかも、主体的に係わっている様子、その関わりかたにはそれぞれの手工業生産がもつ技術的・歴史的要素が濃厚に看取される。

満州神社など、軍から和鏡を受注したため、戦時中には食べ物に困ることはなかったという。しかし、戦時中に軍需品の生産を受注した業者は現在でも大きな工場に発展しており、山本合金のように戦後の困苦を味わうことは無かったという。和鏡というもっとも伝統的な分野に能力を発揮した山本合金の盛衰から、様々な手工業生産がそれぞれの形で戦時協力を余儀なくされながらも、そのあり方が実に様々であったことが判明する。こうした京都における戦前・戦中・戦後のさまざまな手工業生産のあり方を総合的に比較検討する作業は、戦争と京都・文化・歴史を相対視するためにも極めて重要な作業になるであろう。それをデジタル・アーカイブすることの社会的意義は重要である。

現在は聞き取り調査と一部の文献調査が進んでいるが、今後、さらにそれらを深めた上で鋳造工程の技術を記録し、関連鋳造業との比較検討を行う予定である。

石造物の歴史民俗的調査

京都とその周辺における石造物の型式学的分析を行うとともに、石材の産地同定や、贈龍の歴史的背景をふまえて、歴史的に研究する。また、田岡香逸収集資料をデジタル化するとともに、その石像物を3次元計測によって再記録する。

京瓦の考古民俗学的調査

京瓦の伝統的技術を保持している浅田瓦店の技術をデジタル化し、京都における瓦生産の歴史、および、京都における他の窯業との関連

について比較検討する。すでに一部の聞き取り調査を開始しているが、すでに廃止した達磨窯の操業の様子やタタラ作りの様子を記録した20年以上前の8ミリビデオをデジタル化し、さらに聞き取り調査などの考古民俗学的調査を進めて京瓦の伝統的技術を概観する作業を計画している。

おわりに

京都の伝統工芸技術については総合的な研究が十分に行われておらず、その歴史的・美術史的・産業史的意義についても、個別に語られるだけであった。また、民俗調査・考古学調査も不十分であり、「日本史」全体にとっての意義についても情緒的な評価が多かった。

ここでは、民俗考古学的な検討を中心にして、従来の美術史・文献史に偏った叙述から発展した総合的な研究を行う。三次元計測・蛍光X線測定装置の活用もほとんどなされておらず、初めての本格的な研究になる。

研究成果は、すでにシンポジウム・小展示、発掘調査の現地説明会、速報の刊行などによって行っており、現在はシンポジウムの記録をまとめている。古くて新しい京都像を伝統産業の側面から提供できるように、情報を発信してゆきたい。